

後見送おきおくつて立た關かんに出いでた教師、遙はるかに彼等かれらの後うしろ姿すがたをヂツト見みつめて居かたが、遽にはかに首かうをうなだれ、掌たなこもて額ひたのを蔽おほうた、……左ひだりの袂たもとより、ハンカチーフを取り出いだし、目めを押おし拭ぬぐひ、

「ア―彼等かれらの様ような、不便ふびんなものを長ながく世話せわすれば、別わかれの情じやうも亦また一層いちじやうせつないものだ、斯かる時ときこそ人ひとの眞ま情じやうは、顯あはるゝものだ、夫せれに付つても、アレが、最さい前ぜんの言葉ことばの様ように、一いっ生しょう邪路じやろに迷まよはずどうか立派りつぱな出い世せを……」

と低ひくい聲こゑで、獨ひだりり言いを云いつた。

母のこころ

す み れ

天地あかづちの間に、生なきどしいけるもの、人は更さらにも云いはず、鳥獸ちゆうぶつに至いたるまで、皆母みなははの暖ぬくかなる心こゝろに、浴あせざるは、

あらざるべし、まかはあれども、富とめる人に比ひべては、貧ひんしきものゝかた、その心の切きなることは、まざりてなん見みゆる。我が宿しゆく近く、車くるまひく事ことを營なりほとせる人あり、その日ひそのひの、たづきにも、事こと缺かく有あれば、まして三人さんにんまである、女の子おんなこの身の回まわりの、とやくべくもあらず、去年こぞのくれ、隣となりなる家の兒こらが、新あらたしき年の料りやうにとて、調しらへし衣いの、うるはしきを見み、我われ子この上うへの思おもひやられてにや、狭せまき心に堪たへかねけん、母ははは遂すなはち病びやうの床とこに、臥ふしたりき。

愚おろかなるに、似にたれども、教おしへなき婦め女ににしあれば、さもありなんと、我われはいたく心をうたれたり。

我われ子こ遠とほき國くににあるを、故郷ふるさとなる母君ははきみは、朝あな、夕ゆふな、神佛かみぶつに祈いのりて、我われが爲ために幸さい多たかれとのみ、願ねがひ給たまへり、さるは雁かりの便づかりに事こと寄よせては、怪あしげなる文字もじにて、「びやうさせぬよう」どの御言葉ごことばを、見みざるたびもなし、

偶々歸省しつれば、たどしへなき、喜びのゑがほもて、
 我れを迎へ給ひ、さて、出立たんとすれば、又來ん年
 の歸省を、待つぞよと、繰り返し給ふ。なべて世の、
 子もたらん、はゞの母は、一時のまも、心のやすま
 る事は、あらひとぞ覺ゆる、されどそれ中々に、樂み
 の一ツに、かぞへ入るゝものぞ。此暖かなる母の心
 の、限りなきを思へば、孝養を缺ける、我身の恐しさ
 も身にしてみ、いづれの世にか、此厚恩を報い盡す事
 を、得んとこそおもはゆれ。世の子女たち、心して、
 ゆめ孝行をな、怠り給ひそ。

櫻ともみぢ

さくら

朝日にはふさくら花
 そをはくくむは春霞かすの
 花より赤さもみぢばを
 その織りなすは秋の霜しも

文苑 母のこゝろ 櫻ともみぢ 母と妹 春の山

さくらの如き頬ほのいろ
 そをはくくむは誰ならん
 もみぢ色なる赤心まごころ
 染め織りなすは誰ならん

母と妹

小林つね

嬉しきものはうらくと
 かすむ春野にうちつれて
 ひばりの歌をさながら
 妹いもとたのしく母子はごくさ
 はなのたもとにあまる迄まで
 つみて歸ればわがやぎの
 かぎべにまねく母ははきみの
 心の春はるをあたゝかき。

春の山

東くめ

白妙しらたかの衣きぬ
 ぬぎすて、
 薄紫うすむらさきの
 八重やえかすみ
 たちかさねたる
 山々の